

2017年の干支は丁酉(ひのと・とり)！
2017年は長期上昇相場の起点になる可能性もあり、NISA等
で長期積立投資が良い投資方法となるかもしれない。

商品企画部 松尾 健治
窪田 真美

※三菱UFJ国際投信がお届けする、日本版ISAに関する情報を発信するコラムです。

2017年の十二支は「酉(とり)」で前年に続いて「騒ぐ(乱高下)」の年

年末年始近くの、この時期になると、「干支(えと)」の話(記事)がたくさん出てくる。2016年12月8日付ロイターは、「安倍晋三首相は8日都内で開かれた年末恒例のエコミスト懇親会で挨拶し、申(さる)年となった2016年の株式市場について『申酉(さるとり)騒ぐ、との相場の格言通りの年になった』と指摘した。」と報道している(URLは後述[参考ホームページ])。また、2016年12月21日付日本経済新聞電子版は「戦後5回の酉(とり)年の日経平均の騰落は4勝1敗だった。7の年のジンクスに従えば、日経平均は下がるが、干支の経験則に従えば、値上がり期待できる。いずれにしても17年は『申(さる)酉騒ぐ』の格言通り、予想外の事態に振り回されて株価が乱高下する可能性がある。」と報道している(URLは後述[参考ホームページ])。



「干支」の「十二支(じゅうにし)」は下記の通り、「子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥」の順番で続き、2017年は「酉」、動物では「鶏」、読みでは「ユウ、とり」となる。

干支の十二支 ... 2016年 ... 2017年

十二支							
西暦	和暦	十二支	動物	音読み	訓読み	意味	意味(より平易にしたもの)
2008年	平成20年	子	鼠	シ	ね(ずみ)	繁栄	上昇
2009年	平成21年	丑	牛	チュウ	うし	つまずき	下落
2010年	平成22年	寅	虎	イン	とら	千里を走り	大きく上昇
2011年	平成23年	卯	兎	ボウ	う	跳ねる	上昇
2012年	平成24年	辰	竜	シン	たつ	天井	株価が天井つまり高値
2013年	平成25年	巳	蛇	シ	み	天井	株価が天井つまり高値
2014年	平成26年	午	馬	ゴ	うま	尻下がり	下落
2015年	平成27年	未	羊	ビ	ひつじ	辛抱	我慢
2016年	平成28年	申	猿	シン	さる	騒ぐ	乱高下
2017年	平成29年	酉	鶏	ユウ	とり	騒ぐ	乱高下
2018年	平成30年	戌	犬	ジュツ	いぬ	笑い	上昇
2019年	平成31年	亥	猪	ガイ	い	固まる	値固(ねがた)め

(出所：国立国会図書館などより三菱UFJ国際投信商品企画部が作成)

十二支の相場格言は、今年2016年が「申(さる)騒ぐ」で、来年2017年が「酉(とり)騒ぐ」、再来年2018年が「戌(いぬ)笑い」となる。十二支の相場格言とは、「辰巳(たつみ)天井、午(うま)尻下がり、未(ひつじ)辛抱、申酉(さるとり)騒ぐ、戌(いぬ)笑い、亥(い)固まる、子(ねずみ)は繁栄、丑(うし)つまずき、寅(とら)千里を走り、卯(うさぎ)は跳ねる」。

平易に言うと、「辰(たつ)年と巳(み)年には株価が天井つまり高値を付け、午(うま)年は下落で、未(ひつじ)年は我慢、申(さる)年と酉(とり)年は乱高下し、戌(いぬ)年は上昇、亥(い)年は値固(ねがた)め、子(ね)年はさらに上昇、丑(うし)年は下落、寅(とら)年は大きく上昇、卯(うさぎ)年も上昇。」となる。

2017年の干支(十干十二支)は「丁酉(ひのと・とり)」

「干支」は前頁の「十二支(じゅうにし)」で呼ばれることが多いものの、正確には「十干(じっかん)」との組み合わせにより、「十干十二支」と言うものである。「十干」は陰陽五行説の基本「木、火、土、金、水」の五行に各々、兄(え)/陽と弟(と)/陰をあてて「甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸」としたもの。2017年の十干は「丁(ひのと)」、2017年の十二支は「酉(とり)」なので、2017年の干支(十干十二支)は「丁酉(ひのと・とり)」となる。前頁の2016年12月21日付日本経済新聞電子版において「7の年のジンクスに従えば、日経平均は下がる」とあったが、このジンクスは十干に包括されると考えても良いだろう。

陰陽五行説	兄(え)/陽			弟(と)/陰		
	西暦	和暦	十干	西暦	和暦	十干
木(き)	2014年	平成26年	甲(きのえ)	2015年	平成27年	乙(きのと)
火(ひ)	2016年	平成28年	丙(ひのえ)	2017年	平成29年	丁(ひのと)
土(つち)	2018年	平成30年	戊(つちのえ)	2019年	平成31年	己(つちのと)
金(か)	2010年	平成22年	庚(かのえ)	2011年	平成23年	辛(かのと)
水(みず)	2012年	平成24年	壬(みずのえ)	2013年	平成25年	癸(みずのと)

(出所: 国立国会図書館などより三菱UFJ国際投信商品企画部が作成)

先述の報道で見られた通り、十二支と日本株との関係が語られる事が多いが、今回のコラムでは十二支だけではなく、十干についても見て、さらに日本株だけでなく米国株も加え、米ドル、金、そして日本の国内公募株式投信との関係を見る。日本株も国内公募株式投信もNISA(少額投資非課税制度)で利用される事が多く、NISA投資家にとっても参考となる情報と思われる。

2017年と同じ十干は日本株安・米株高、2017年と同じ十二支は日本株高・米株安、2017年と同じ干支(1957年)は日本株大幅安だった!! 2017年は長期上昇相場の起点になる可能性

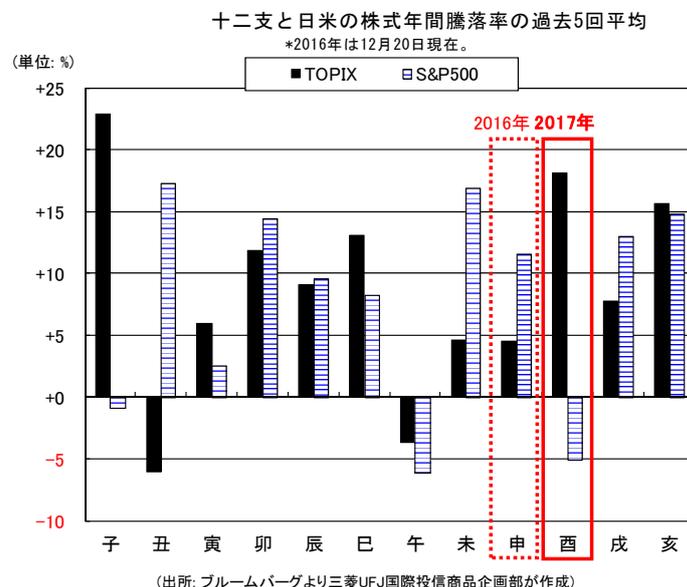
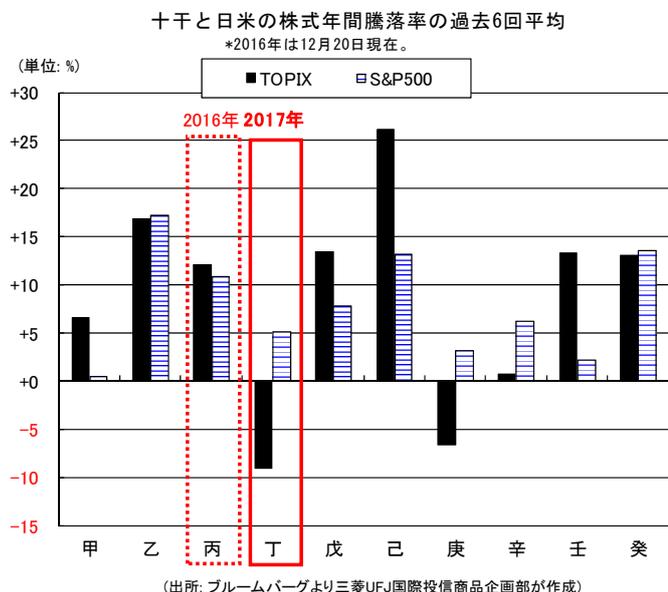
まず、日米株式である。次頁の左グラフが十干、次頁の右グラフが十二支、2016年が破線の四角い枠、2017年が実線の四角い枠で囲んである(以下同じ)。

日米株式の2017年の干支は、十干と十二支では反対の結果となった。十干の「丁(ひのと)」は平均的に日本株安、米国株高であった。十二支の「酉(とり)」は、平均的に日本株高、米国株安だった。十干でみると、「丁(ひのと)」は、東証株価指数(TOPIX)の年間騰落率が平均-9.9%と、十干の中で最大の株安だった。ただ、翌年2018年の「戊(つちのえ)」は+13.4%、翌々年2019年の「己(つちのと)」は+26.1%と上昇相場となっている。一方、十二支では「酉(とり)」は+18.1%と十二支の中で2番目の日本株高だった。ただ、こちらも「酉(とり)」の+18.1%ほどでもないが、翌年2018年の「戌(いぬ)」は+7.7%、翌々年2019年の「亥(い)」は+15.7%と上昇相場となっている。

2017年の一つ前の「丁酉(ひのと・とり)」にあたる1957年にTOPIXは前年比-15.7%と下落している。1957年と言えば、石橋湛山内閣の総辞職に伴う岸信介内閣の発足や、アジア風邪の流行、神武景気(1954年末に始まる景気拡大基調が1957年央にピーク)の反動で急速に不景気(なべ底不況)となった年である。

一方の米国株だが、十干では、「丁(ひのと)」、「戊(つちのえ)」、「己(つちのと)」と株高である(さらに加速している)。十二支では、「酉(とり)」こそマイナスだが、その翌年から2年連続して上昇相場となっている。

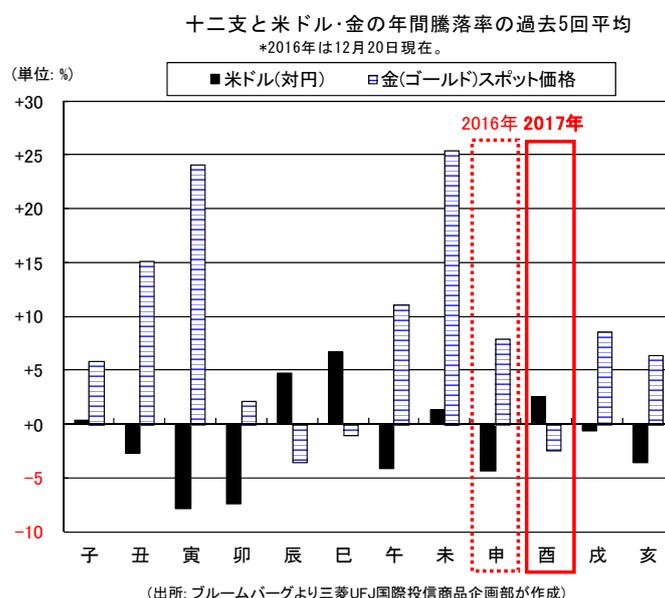
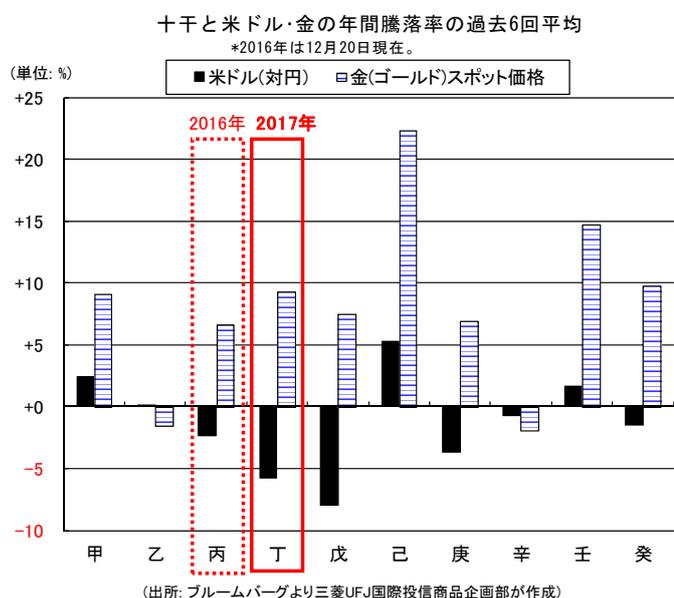
十干と十二支で方向が反対で、判断が難しい年にも思われる。だが、その後は共に上昇している事から、2017年は長期上昇相場の起点になる可能性があると言える。それであれば、2017年は早々、最大年120万円のNISA(少額投資非課税制度)等で長期積立投資を行っていくのが良い投資方法となるかもしれない。



米ドル・金は平均的に十干がドル安・金高騰、十二支がドル高・金下落

次に、米ドル・金を見る。米ドル・金の2017年の干支は日米株と同様、十干と十二支で反対の結果となった。十干「丁(ひのと)」では平均的にドル安・金高騰、十二支の「酉(とり)」ではドル高・金下落だった。

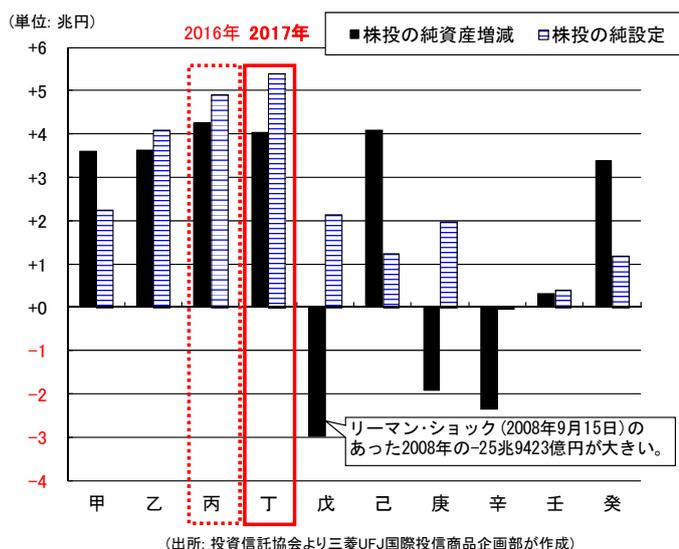
十干で見て「丁(ひのと)」の米ドル安は2016年の「丙(ひのえ)」に続くもので、「戊(つちのえ)」年にかけて大幅なドル安だった。ちなみに、2015年の十二支の「未(ひつじ)」に、大きな金高騰となっているが、これは1979年に第二次石油危機(イラン=イスラム革命でイラン産原油輸出途絶)や旧ソ連のアフガニスタン軍事介入などが起こり+127%となった事がほとんどである。



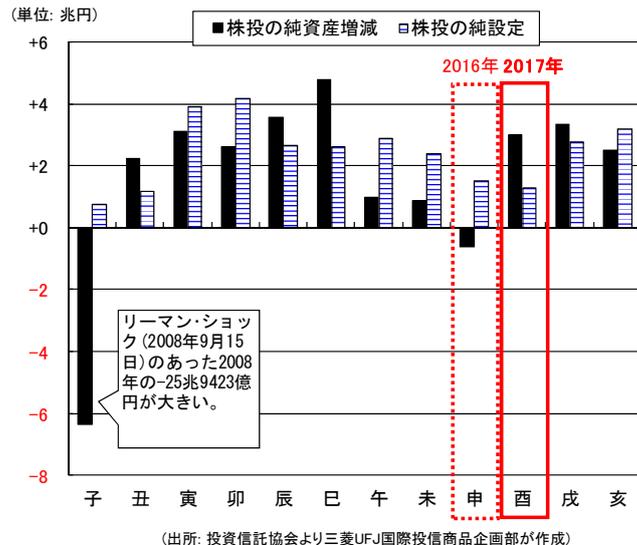
株投は十干では平均 4 兆円と純資産増で 5.4 兆円の純流入(最大)、 十二支では 3 兆円の純資産増で 1 兆 2896 億円の純流入

日本の国内公募株式投信(株投)も見る。2017年の十干でも十二支でも、いずれも平均的に株投の純資産は増加していた。資金純流入については、十干の「丁(ひのと)」では最大の純流入であり、十二支の「酉(より)」では純流入の小さい方から3番目だった。

十干と日本の国内公募株式投信の純資産増減と純設定の過去5回平均
*2016年は11月30日現在。

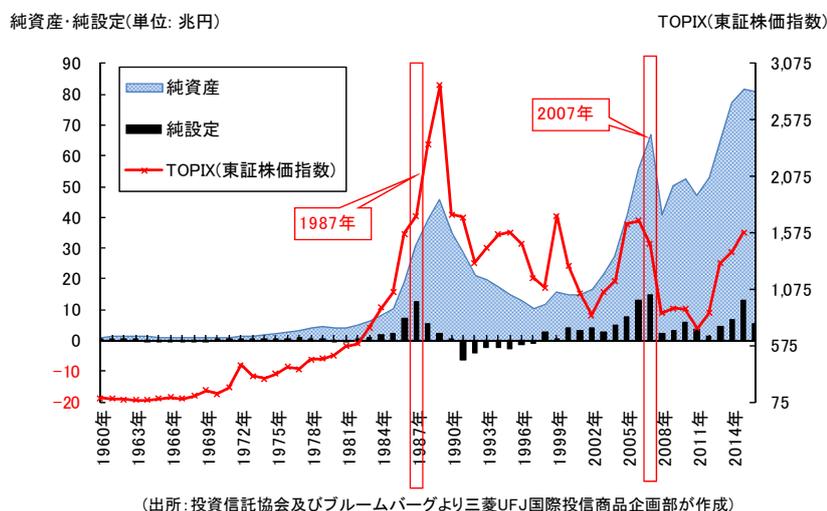


十二支と日本の国内公募株式投信の純資産増減と純設定の過去4回平均
*2016年は11月30日現在。



十干について、上記左グラフの「丁(ひのと)」は平均+4兆289億円の純資産増(3番目)で、平均+5兆4157億円の純流入(最大)となっている。これは、特に1987年・2007年の「丁(ひのと)」に純資産増と純流入増があった事が大きい。1987年と言うと、通年では+10.5%となっているが、1987年10月19日には世界株暴落(ブラックマンデー)があった。2007年も、2007年8月9日にパリバ・ショック/米サブプライムローン(低所得者向け住宅ローン)問題があり通年で-12.2%となっていた。だが、日本人は日本株投資で逆張り志向が強く、株安となると投資を増やす場合が多い。

日本籍の国内株式投信の純資産と純設定とTOPIX(東証株価指数)の推移
(1960年～2016年11月まで、年次データ)
*国内株式投信…単位型及び追加型投信(公募)。



十二支について、「酉(とり)」の純資産は平均+3兆円増で純流入は+1兆2896億円だった。「酉(とり)」の過去4回(1969年、1981年、1993年、2005年)で、純資産増と純資産減が2回ずつあった。一方、2005年を除き過去3回の酉年は純流出(*過去3回以上純流出となったのは申/さる年と酉年だけ)だった。いずれも前年から続くものだが、その流出額は減少、1969年・1981年の酉年では、翌年以降、数年間も純流入となっている。唯一、純流入の酉年2005年は、2004年から2007年まで4年続いた純流入拡大期だった。十二支では特色の見出しにくい動きとなっている。

以上、判断が難しいものが多かったかもしれない。ただ、繰り返し、2017年は長期上昇相場の起点になる可能性があると言える。それであれば、2017年は早々、最大年120万円のNISA等で長期積立投資を行っていくのが良い投資方法となりそうではある。

2017年は格言通り、「騒ぐ(乱高下)」年となり、上下に激しく動く様な状況になる可能性はあるが、そこは以上の事などをしっかり考え、冷静な対応をしていきたいものである。

以 上

[参考ホームページ]

2016年12月8日付ロイター「2016年株式市場、相場格言どおりだった＝安倍首相」…

「<http://jp.reuters.com/article/abe-stock-idJPKBN13X0ZR>」、

2016年12月21日付け日本経済新聞電子版「2万乗せが近づく株価、「掉尾の一振」期待高まる」…

「<http://www.nikkei.com/article/DGXMZO10887350Q6A221C1000000/>」、

2016年12月12日付日本版ISAの道 その166「税制改正大綱発表! 20年の積立NISA創設!!～現行NISA vs 積立NISA vs ジュニアNISA、積立NISAの理解、現行NISAの「2018年/2019年問題」が改善～」…

「http://www.am.mufg.jp/text/oshirase_161212.pdf」。

本資料に関してご留意頂きたい事項

- 当資料は日本版ISA(少額投資非課税制度、愛称「NISA/ニーサ」)に関する考え方や情報提供を目的として、三菱UFJ国際投信が作成したものです。当資料は投資勧誘を目的とするものではありません。
- 当資料中の運用実績等に関するグラフ・数値等はあくまでも過去の実績であり、将来の運用成果を示唆あるいは保証するものではありません。また、税金、手数料等を考慮しておりませんので、投資者の皆様の実質的な投資成果を示すものではありません。市況の変動等により、方針通りの運用が行われない場合もあります。
- 当資料の内容は作成時点のものであり、将来予告なく変更されることがあります。
- 当資料は信頼できると判断した情報等に基づき作成しておりますが、その正確性・完全性等を保証するものではありません。
- 当資料に示す意見等は、特に断りのない限り当資料作成日現在の筆者の見解です。
- 投資信託は、預金等や保険契約とは異なり、預金保険機構、保険契約者保護機構の保護の対象ではありません。
- 投資信託は値動きのある有価証券を投資対象としているため、当該資産の価格変動や為替相場の変動等により基準価額は変動します。従って投資元本が保証されているわけではなく、基準価額の下落により損失を被り、投資元本を割り込むことがあります。
- 投資信託は、販売会社がお申込みの取扱いを行い委託会社が運用を行います。
- 投資信託をご購入の場合は、販売会社よりお渡しする最新の投資信託説明書(交付目論見書)の内容を必ずご確認のうえ、ご自身でご判断ください。
- クローズド期間のある投資信託は、クローズド期間中は換金の請求を受け付けることができませんのでご注意ください。
- 投資信託は、ご購入時・保有時・ご換金時に手数料等の費用をご負担いただく場合があります。

本資料中で使用している指数について

- ・東証株価指数(TOPIX)に関する知的財産権その他一切の権利は東京証券取引所に帰属します。